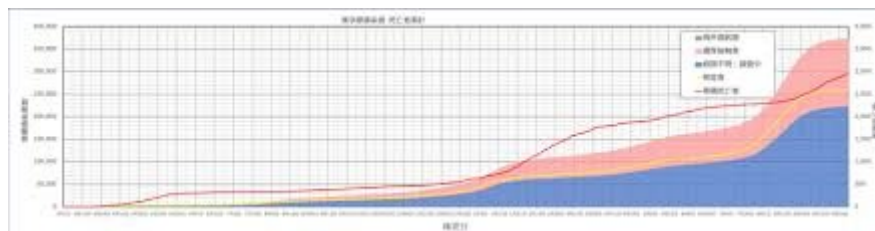


2021/10/28

(うときゅういっきの「これから」 ねえ、聞いてんの?) 書庫版



超巨大巨視的な視点に立って見れば、この大宇宙の中でそこに生物が居ようが居まいが或いは又そこで悲喜こもごもの様々なドラマが展開されて居ようが居まいが「星がひとつ」消えた処でどうという事はないのかもしれませんが。

生者必滅会者定離、万物で滅びない物はない事が摂理であるならば、です。

そして全ては原因によって生起される結果と適者生存といういずれも無感情なメカニズムの「その時点での進み具合」であるならば、です。

もしそれらが摂理であるならば、誰にどうお願いしようが恐らく誰(何)も聞き入れて呉ないでしょう。聞き入れて呉ないと云うより、相手はそうした耳(受け口器官)がない「コミュニケーションレスな存在」だからです。

一方生身の存在である我々は

「冗談じゃない。そんな事をされたんじゃ堪らない」訳です。

我々は堪らない。かといって誰(何)も聞いてくれそうもない。

となれば残された道は只一つ。

「我々自身で何とかするしかない」

と言う事になります。

そのくらい超巨大巨視的スケールで考えてみると、今この星で取り沙汰されている「環境問題」の対応策は言い方は悪いですが「ゴッコの域」を出ていない様な気がしてなりません。想うに脱炭素等は「環境問題」等という「箱庭的問題」ではなく我々の「存続」に関わる「地球規模の死活問題」の様な気がしてならないのです。

「摂理」から見れば「星が一つ消えようが消えまいがどうでもいい事」なのです。

それらは「望むべき結果」や「落とし所」等に関与していないのです。

なので、当然

辛さや大変さを語れば誰かが何処かで見ていて、或いは誰かが投稿して取材陣が駆けつけて報道し、何とかしてくれる筈の感情や倫理問題として訴求出来ず、何から手を着ければいいのかと言う優先順位問題としての回答も得られず、どちらがより有用かという価値の優劣問題としても取り上げて貰える事のない音信不通、連絡不能、質問すら不受理な相手の様な気がするのです。

誰が何と言おうと只「摂理のメカニズム通り歯車がゴトンと回転して次のギア（歯の山谷片）に移行する」だけ。

そう考えると「消えたくない我々」は、
例えば人類にとって好都合かどうかの価値判断を一旦封印し
純科学的、力学的な思考や手段を用いて
本気で上述の「わからんちんのぬらりひょん」相手に
世界の人知を集めた「相当なる知恵」を以て
具体策を起、立案。

試行錯誤しつつも可及的速やかに
実行に移さなくてはならない。

最早対岸の火事が一線を越えた状態。

の筈なのですが、どうもそうはなっていない。

そんな気がして強い焦りや苛立ちを覚えているのです。

（注記）

現時点で考えられる全ての温暖化対策をしても 2030 年には CO2 量は 16%増えるのだそうです。

現下の状況はコロナ禍でよく目にした「上昇カーブが緩やかになっただけで下降（減少）に迄は至っていない」と言う同じ絵姿のままの様です。